

もくじ

③人々のねがいと当時の人々の努力

戸ノロぜきは、どんなねがいによってだれがつくったのでしょうか。



みんなは、戸ノロぜきがどんな地形のところにつくられたのかわかりました。秋子さんが、「戸ノロぜきは、どんなねがいによってだれがつくったのですか。」とたずねました。

そこで、先生からいただいたしりょうを中心として、くわしく調べてみることにしました。

戸ノロぜき年表

何年	できごと
1530年ごろ	・このころ、会津地方では、何か月も雨がふらず、日でりのため作物がとれない年がたびたびあった。
1567年	・会津地方で作物がほとんどとれず、多くの人があえ死にする。
1623年	・八田内蔵之助が猪苗代湖から戸ノロぜき(八田野ぜき)をひく工事を始める。
1636年	・戸ノロぜきが八田野まで完成する。(八田野ぜきとよばれる。)
1657年	・花積弥市が戸ノロぜきを鍋沼から金堀、上長原へのぼす。
1693年	・古川惣治衛門が、戸ノロぜきを若松の町までのぼす。若松の米のしゅうかくが大はばにふえる。(戸ノロぜきとなる。)
1780年ごろ	・このころ会津地方で日でりのため、作物があまりとれない年がたびたびあった。
1833年	・全国的に作物のできがわるく、会津地方では、4年間作物がとれず、多くの人があえ死にする。 ・佐藤豊助を中心に戸ノロぜきの水をふやす工事が始まり、2年後完成する。

[人々のねがいと八田内蔵之助の努力]

◇人々のねがい◇

●むかし、八田野(旧河東町)のあたりには、水田にてきしている平らな土地がかなりありましたが、なべ沼(ため池)や清水しか使えなかったため、水田はわずかしかなかった。近くに日橋川は流れているのに、深い谷になっているため、川の水は使えません。

「水の少ない台地に水を引きたい。」これが人々の長い間のねがいでした。

◇八田内蔵之助の努力◇

●380年ほど前、八田野村の肝煎という役についていた八田内蔵之助という人がいました。

●内蔵之助は、猪苗代湖から水を引いてくることを考え、との様にねがい出ました。

●会津藩の助けをかりて工事にかかりましたが、との様がかかり、工事は2年で中止に

なりました。内蔵之助は、自分のお金で工事をすすめましたが、とうとうお金がなくなり、工事は中止になりました。

●しかし、会津藩がまた工事を助けることになり、14年をかけてようやく猪苗代湖の水を八田野村へ引くことができました。

六軒から八田野に広がる水田



今のなべ沼(むかしは小さなため池)



八田野ふきんの米しゅうかくのふえ方



「会津の堰」の資料から

土地のようすを歩いて調べる豊助たち



土地の高さをはかる豊助たち



[人々のねがいと佐藤豊助の努力]

◆人々のねがい◆

●戸ノロぜきが完成して100年以上たっても、日でりの害はなくなりませんでした。水不足で米はほとんどとれず、人々はたいへんこまりました。

若松の町を流れる川の水もお堀の水もへっていきさや火事のときたいへん心配しました。「もっとたくさんの水を若松の町に引きたい。」というのが人々のねがいでした。

◆佐藤豊助の努力◆

●170年ほど前、会津藩のさむらいで、佐藤豊助という人がいました。

●豊助は、若松の町にもっとたくさんの水を引くよう藩からめいれいされました。

●猪苗代湖から引いている戸ノロぜきの水に目をつけた豊助は、用水路のはばを広げて深くほること、飯盛山に洞門をほること、慶山で湯川から引いた「かりがねぜき」と合わせて水を流すこと、これらの3つの工事によって若松の町にたくさんの水を流すことができると考えました。

●工事が始まり、やっとできた土手が、雪どけ水のためにくずれてしまったこともありましたが、豊助はくじけませんでした。

●この工事で、特にたいへんだったのは、飯盛山の洞門ほりでした。豊助は、地形や地質を調べ、土地の高さを何度もはかり、地図を何まいも書きました。

●じしゃくで方向をたしかめながら、くわやもっこ、石のみなどを使って、わりあいやわらか

い岩をほりすすみました。暗い洞門の中は菜種油をもやして明るくしました。
●3年間、のべ 55,000 人の人手をかけた戸ノロせきを直す大工事は、こうして終わりました。

水路のはばを広げ、深くほる工事のようす 飯盛山の洞門ほり



[工事に使った道具]

わたしたちは、工事に使った道具をじっさいに使ってみることにしました。道具は、先生を中心にみんなで協力してあつめました。
もっこや石のみ、すき、くわなど、自分で使ってみたいものをえらんで、グループでやってみることにしました。

昔の「おの」



土をかためる「土づき」
を使う友だち



「もっこ」をかつぐ友だち



昔の人がはいた「わらじ」



よし子さんは、やってみた感想を次のようにまとめました。



わたしは、さち子さんといっしょにもっこで石をはこびました。二人でぼうを持って、かたにズシッと重みがきて、歩いてもふらふらです。1日中やっていたら、かたがいたくなるし、すぐつかれると思います。こんなことを昔の人は毎日つづけたのかと思うと、たいへんさがわかります。